

答 辞

仙台に芽吹く梅の花は、淡い空の色と重なって優しく春の訪れを教えてくれる。
春の匂いはさよならと始まりを繰り返す学校の匂い。

今日、旅立ちの日。仙台城南高校 56 回目の卒業生。
仙台城南第四期生として私たち 389 名確かに仙台城南高校に名を刻みました。

校門に掲げられた卒業式の看板に出迎えられ、「友愛の花の環におう」横断幕晴れがましく、
桜花吹雪を散らした校舎。

本日は、私たち卒業生のためにこのような正大な卒業式を挙行いただき心より感謝申し上げます。

ご来賓の方々を始め、校長先生からの花向けのお言葉を頂戴し気持ちが奮い立ち、身の引き締まる思いです。

晴れて卒業を迎えることができましたのは、多くの皆様のおかげでございます。ありがとうございます。

私たちは入学時に「3年後の自分へ」という作文を書きました。その夢と希望は、高校時代に研磨され、次に迎える成人の自分へとつなげて参ります。

あっという間の3年間。

授業が終わると狭い廊下は教室からあふれ返る生徒でいっぱいになり、まるで通勤ラッシュのような賑わいだった毎日。

全校生徒のアリーナへの入退場はいつも1時間弱。

5月。異常な盛り上がりで過熱ぶりで勝ち負けに燃える体育祭。総体前の負傷リスクもなんのその。クラスTシャツ一つ作るのにもこだわりました。

8月。城南フェスティバル大盛況。出店は売切れ続出、どのパフォーマンスにもお客さんで前が見えず、歩くのにも精一杯でした。

10月。白熱した激戦が全校クラス対抗で無礼講よろしく繰り広げられる。何よりも体育をこよなく愛す私たちだからこそ極められる頂点。

檄(げき)が飛ぶ中、必死にボールを追いかけたあの日も。

分かっていたのに、お前は分かっていると叱られて、唇を噛んだ日。

割り切れない感情のおさめ方も知らずに衝突もしました。

けれども今、鮮明に蘇る風景は、あの時、あと少しで届いていた。見えていた。必死だった。声だって聞こえていた。勝ちたかった。負けたくなかった。懇願するように仲間を信じた。汗が滝のように流れて止まらなかった。これでもかと応戦合戦でもつれ込む展開にいつのまに僕たちチームは一つになって奔走していた。一生の願いを何度も繰り返し、あと少しだけでいいから時間を止めてほしかった。無情にも耳につんざくほどのホイッスルが頭に響く中、喉の奥に抑え込んでいた熱いものがこぼれて顔を上げられなかったあの日。

時間が優しいのは、ゆっくりと大切な事を気付かせてくれるインターバルを与えてくれること。

負けないことよりも、負けたことに負けない経験の方がずっと心を豊かに世界を見詰める視野をもつことを知りました。

そして部活と生徒会の両輪での高校生活をあえて選択したのは、自分で自分を変えるための挑戦でした。苦しい葛藤の中で私をつなぎとめてくれたものは、仲間と恩師、親の励ましです。

そして私たちを、いつまでも待っていてくれたのは家族でした。おいしいご飯とあたたかいお風呂、ありがとうございました。

私たちは生かされていることに感謝します。まだまだ道半ば。この先どこへ行こうとも父と母の声はいつも聞こえています。

澄み渡る空の地平線には海が見える教室。

学校帰り、顔を上げれば仙台の夜景にひときわ光り輝く電波塔。

この先ずっと誰かのために灯りを照らし続ける仙台城南高校。

365日開いている仙台城南高校。

忘れ物を思い出したら取りに来てもいいですか。

効率的にはかどる一人の力よりも、ゆっくりでも仲間と連携して進む力の方が何よりの力であることを信じて、今、確かに歩き出します。

最後になりましたが、校長先生はじめ、先生方のご健勝と、仙台城南高等学校のさらなる発展を祈念し、卒業生の答辞といたします。

平成 31 年 3 月 1 日

仙台城南高等学校 第4期生徒会長 高橋亮祐